

春の香りが漂う中島商店街

中島商店街の歴史

ゆったりと中島町の中心部を流れる熊木川。古くから、この地域に住む人々に多くの恵みを与えてきた。その熊木川に寄り添うように中島商店街がある。

中島町史によると、このあたりは、古くは七尾西湾を行



商店街の後ろを流れる熊木川

き交う回船が立ち寄る交通の要衝で産物の集積所であったとともに宿場町としても栄え

商店街のスーパーで買い物をする人々



たという。商店街は町の百貨店といわれ、約550メートルの通りには、食料品店、電気店、履物店、理髪店、映画館など、昭和30年代頃まで、一業種に2〜3店舗があり、約100の店舗が軒を並べていたという。

歴史が漂う街並み

商店街では、「まいどさん」を中心に勉強会を重ね、昨年の春、まちおこしの取り組みとして町中展示「時のよそほひ」を開催した。テーマは「ひなまつりによせて」である。

昭和3年の中島駅開業や国道249号線の開通とともに、人の流れが変わり、徐々に商店街を訪れる人が減っていった。現在の店舗数は、30店舗ほどになっている。

衰退の一途をたどる商店街。しかし、「これではいけない、なんとかしたい。」と、おかみさんの有志が立ち上がり、平成18年9月におかみさんの会「まいどさん」が結成された。

その秋には「杜のにぎはひ」

をテーマに能登演劇堂のロングラン公演に合わせて開催した。

この取り組みは、店舗や民家などで思い出の品などを展示し、眠っているお宝にも一度光を当てるといふもので、



享保雛の展示

あるものを活かしたお金をかけないまちづくりを目標としている。「まいどさん」発足のきつ

かけとなった大黒呉服店の大黒久美子さんにお話を伺った。大黒呉服店は、この通りのなかでもひとときわ風格を漂わせている築80年ほどの建物である。



商店街通りを歩く人々（平成19年春「時のよそほひ」から）

「時のよそほひ」の開催は、近くにある日本でも数少ない演劇専門のホールである能登演劇堂に毎年たくさんの方が訪れているのに、そのまま帰ってしまったのはもったいない。ぜひ中島の街並みを見てもらいたいというのがきっかけと、遠くから訪れる方は、この商店街の街並みを見て、「いい街並みですね」と言ってくれるという。活動をとおして、自分たちにとつての当たり前が、他の人から見ると当たり前でないこと、それをきっかけに、地域にある自然、歴史、祭り、食など（能登野菜、能登かきなど）すばらしい素材が周りにあるのに、それらを活かしきれていないことに気が付いたという。

あるものを活かした まちづくり

来る3月15日から23日、中島商店街では、「時のよそほひく春のいぶきく」が始まる。実行委員長を務める勢登鮮魚店主勢登和秀さんにお話を伺うと、今回は、春を感じられるものを通りの店舗や民家の人にも協力してもらい、飾る予定だという。また、新しい試みとしてクイズラリーを行い、訪れる人に楽しみなながら



町中展示の様子

まちを知ってもらおうという。地元産品などのフリーマーケットも開催し、遠くから訪れる人はもちろんのこと、近くに住む人々にもぜひ来てもらいたいと語る。
通りの人々が何を飾ろうかと楽しそうに考えている様子

が目に見え、ゆっくりと時間が流れているようで、いつまで話をしていても飽きない心地よい空間だった。訪れる人もきつとこんな気持ちになるにちがいないと思った。



落ち着いた佇まいを見せる大黒呉服店

のを飾り、訪れた人々との会話を楽しむ。商店街のある人は、楽しんでやることが何よりも大切。自分たちが楽しめば、それが訪れた人にも伝わり、喜んでもらえると話してくれた。

この日は、この時期にしては珍しい天気の良い昼下がり。店先には、ぽかぽかとした陽光が差し込んでいます。ご近所の方が、お茶を飲みながら楽しんで話しているの、聞いてみると、これが日課で買い物に行く途中に、店に立ち寄って話をするそうで、この通りには他にもいくつかさんな気安いい店があるという。



商店街を歩いて下校する中学生

訪れる人々は、万葉ゆかりの里の自然豊かな景色に癒され、商店街の人情に触れることで、この町をまた訪れたいと感じるにちがいない。熊木川では、そろそろイサザが春を運んでくるころである。

DATA お館の水とタブの木



中世に「熊来荘」といわれたこの地を支配した熊来左近将監の館跡と伝えられている。

お館の水は上水道ができるまで、中島地区の人々の生活用水であったという。

昭和5年の「能登中島の大火」にも耐えたタブの木には、しめ縄がかけられ、現在も町内の人々を見守っている。

